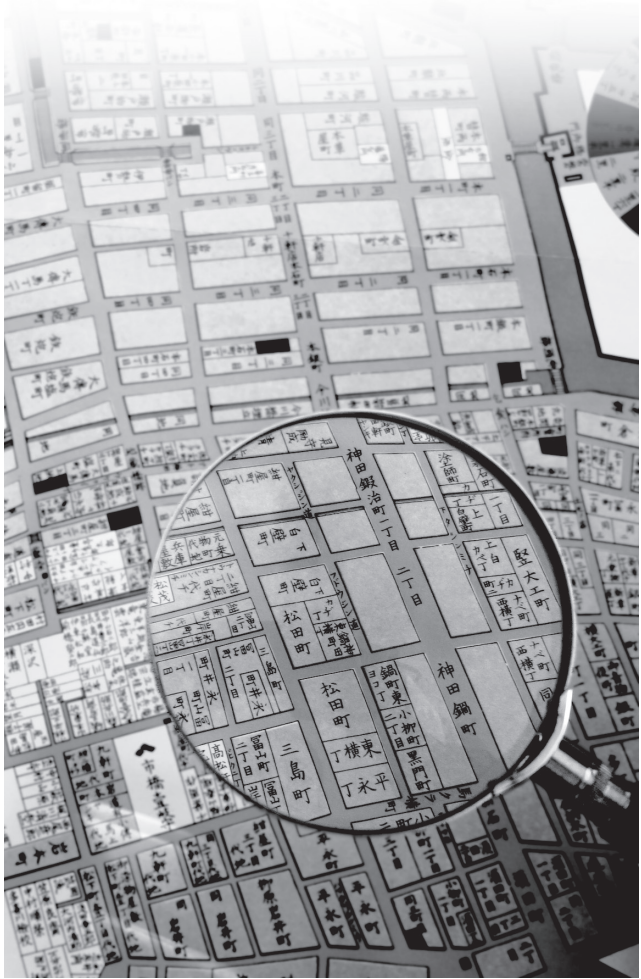
東京ことば——その過去・現在・未来

田中章夫
Akio TANAKA

武蔵野書院



まえがき

数ある、日本各地の「〇〇ことば」の中で、一番、人気があって持てはやされるのは、やはり「京ことば」であろう。大阪育ちの田辺聖子さんは、大阪ことばの「そややそや」の「〜ヤ」と、京ことばの「そうえ」の「〜エ」とを比べて、

京都弁の「え」は、いかにも王城の地らしく優雅に聞きならされるのに、大阪へ来て「や」を耳にすると、猥雑・下品でならん、という人も多い。

「そうえ」「お休みしたらどうえ」の大宮人風のゆかしさに対し、「そややそや」「何やどないしたんや」の賤民風のはしたなさ。はしたないくせに向う意気は強くない。（略）東京弁ではこれが「だ」になる。演説の最中、サクラが「そうだッ！」と入れると、ぐっと雰囲気が盛りあがって弁士・講師の舌はいっそう熱を帯びるであろう。ここへ大阪弁のかけ声が「そややそや」と入ると、腰砕けもはなはだしい。（『大阪弁ちゃらんぽらん』中公文庫、一九八一年〈昭和56〉、194〜195頁）

と、京都弁・大阪弁・東京弁、三都の言葉の特徴を、巧みに描き出している。

京都の言葉が耳にやわらかく響くのは、母音を丁寧に発音するからだと云われているが、母音が消えてしまいやすい（無声化）東京あたりの言葉は、「歯切れがいい」とは評されても、「優雅」とか「ゆかしさ」とは縁遠い。

「歯切れがいい」というのは、別に「ベランメエ調」ではなくて、「はっきりしたメリハリのきいた話しぶり」のことで、東京育ちの、作家・幸田文（こうだあや）さんは、「東京言葉」と題する座談会で、嫁ぎ先の「おばあさん」の言葉を、つぎのように評している。

わたしが片づいた先は酒問屋でございました。そこのおばあさんは、東京の人なんですけど、ゆっくりした、それでいて歯切れも悪くない、上方も少し入っている、サラサラーッとなだらかな言葉でした。これが商人の言葉かって、わたくし思いましたけど、父（作家の幸田露伴）は、昔のなごりの残っているものの言い方だ、といっていました。たった一つ、それで憶えてますのは、わたし、お化粧を上手じゃないんですの。（略）化粧下手で、モッサリしている私が気になるのでしょう。紅をもってきて、「文子さんや、もうスコーシお色をさしたらどうかしら」って。逃げ回りましたけど、柔らかァーく言うその言い方。

（『図書』365号、岩波書店、一九五五年〈昭和30〉）

「ゆっくりした、それでいて歯切れも悪くない、サラサラーッとなだらかな言葉」――いかにも、古くからの商家の大女将（おおおかみ）の、余裕のある落ち着いた話しぶりを思わせる。

それに対して、いわゆる標準語や、そのベースになった、東京の山の手あたりの言葉は、「ツメタイ」とか「うるおいがない」とか言われて、プラス評価には、あまりお目にかからない。そうした中で、瀬戸内晴美さんの小説『色徳』の主人公の語る、山の手言葉・評は、異色である。

ふたぁりで奈良へ遊びにいた時やった。猿沢の池のほとりに乳母車がひとつ、ぽつんと置かれていて、（略）守（もり）の姿がどこにも見えない。晶園（しょうえん）があの頃はまだ二十七、八くらいやったか、（略）真白のスーツをしゃきっと着ていて（略）そんな姿で、乳母車を覗（のぞ）きこんだ。（略）何してるんやと大声で呼びかけたら、涙のいっぱいたまった目をぼんやりあげて、（略）「眠っている赤ん坊って、涙の出るほど可愛いものですわねえ」と、うわ言のようにいいおった。儂（わし）は、あの女の山の手風の東京弁と、何ともいえない柔らかな声音が好きで、長つづきしたようなものやったが、この時くらい、晶園の標準語のアクセントの美しさと、標準語のあらわすことばの哀切さというものを感じたことはなかった。

（『色徳』上巻「空や寂や」新潮文庫、一九七七年〈昭和52〉、6～7頁）

山の手育ちの一人として、なんとも面はゆい感じがする。

この小説の主人公は、京・大阪の綺麗所を総なめにして活躍する相場師だが、その語り口は、

ええと、あの美しい女は誰やったかな。ほう、数珠も古渡り珊瑚に紫の房をつけている。あれだけの古渡りはいまは、もう、めったにあるものやないで、あっ、あれは儂が（略）見つけた掘出物の珊瑚やないか、あれをやったのは克代やないか、何や克代か、（略）克代にちがいない。

（上巻、8頁）

と、ごく自然な大阪弁で綴られている。初めに紹介した、田辺聖子さんの『大阪弁ちゃらんぽらん』は、ここに出てくる「めったにあるものやないで」の「～で」について、

あいつ女房居るねんで。知らんねんな」「知ってるわいな」（略）ここには、大阪弁の語尾の特色がみんな出ている。「居るねんで」の「デ」であるが、これは標準語や東京弁でいうと「だよ」とでもいうところであろうか。（略）ご存じ「王将」※では、「小春ゥ。死んだらあかんでェ」と観客の紅涙をしぼるところで、この間のびした「で」が、哀調切々と聞かれるのである。

（※北条秀司 作、戯曲『王将』新月書房、一九四七年〈昭和22〉／宝文館、一九五七年〈昭和32〉）

（196～197頁）

と、関西名人などと称された坂田三吉・八段のセリフを引いて説明している。「優雅」とか「ゆかしい」とか言われなくても、大阪弁の個性の豊かさは抜群である。

東京弁にも、かつては落語の大家サン夫婦や熊サン・八ッツァンの口にするような、江戸言葉の雰囲気をたたえた、独特な言葉があったが、関東大震災や大空襲による、住人の入れ替わりによって、そうした個性的な言葉遣いは急速に衰退していった。

そして、近年は、近郊に大団地が生まれ、近県の新興住宅地の開発が進んで、全国から、新しい住人を迎える、人口の東京一極集中が進展してきた。それによって、南関東一円に「首都圏言葉」とも云うべき、共通の言葉が生まれつつある。これは、今までの東京語系の、いわゆる「標準語」とは、ひと味違った、これからの「標準日本語」につながっていくものではないかとも考えられる。

そうした意味で、江戸言葉から東京言葉へ、そして、首都圏に広がる新しい言葉へ、といった変容の足取りを、いま、この辺でたどってみたいと思う。

なお、本書で云う「江戸」「東京」は、いずれも「市街地とその周辺地域」の称として用いている。

二〇一七年　正月

目次

まえがき i

I 「あづま言葉」の原風景 1
1. 京言葉と東国語 3　2. 言葉の「江戸お打ち入り」 12　3. 上方言葉の「あづま下り」 18

II 東西言語圏の成立 27
1. 江戸言葉の急成長 29　2. 西の上方語 vs 東の江戸語 35

III 江戸言葉の諸相 43
1. 彩り豊かな江戸言葉 45　2. 武家言葉と町人言葉 46
3. 男伊達「六方者」の六方言葉 56　4. 吉原「アリンス国」の言葉 63

IV 東京語の芽生え 69
1. 「エド言葉」から「トーケイ言葉」へ 71　2. 西国武士言葉の東上 77

V 東京語の文明開化 81
1. 日本語テキストの言葉 83　2. 「君も来タマエ」／「よくッテヨ」 87
3. 東京の中流社会の言葉 94

VI 教科書言葉・小説言葉 99
1. 國語ノ標準ヲ知ラシメ、其統一ヲ圖ル 101　2. 言文一致のリーダーたち 111

VII 山の手ことば・下町ことば 119
1. 「武家の町・町人の町」から「勤め人の町・商人の町」へ 121
2. ベランメエ調・山の手蛮語・ざあます言葉 127　3. 下町言葉の衰退 132
4. 「旧市の言葉／新市の言葉」から「区部の言葉／郊外の言葉」へ 137

VIII 東京語圏の拡張と変容 143
1. 東京語と放送言葉 145　2. 団地ことば・首都圏ことば 158

あとがき 169

江戸から東京へ——言葉の記録 173

図表一覧 180

索　引 189